

## それいゆ

東京：ヒマワリ社、1946—1960



1951年11月号の表紙 中原淳一による（パリ滞在時）

本誌は中原淳一（1913—1983）が企画・編集し、自らデザインもして彼の才能と魅力が遺憾なく発揮されている雑誌である。終戦の翌年創刊された同誌は、夢と憧れをこめてフランス語の太陽を意味する「それいゆ」（Soleil）と名付けられた。ファッションに関する記事が多く掲載されており、1946年8月号から1960年8月号までの復刻版は国書刊行会から刊行されている。復刻版別冊では、「昭和二十一年八月、何もかもが灰色の焼け野原のような東京で、輝くような真っ赤な表紙の『それいゆ』第一号は創刊されました」と創刊号の印象を記している。創刊号の中原によるスタイル

画の表情は、後の柔らかいロマンティックな雰囲気との絵と比較するとやや硬く、デザインの表現も直線的でまじめな感じがして、創刊号という緊張感が伝わってくる。しかし、号を重ねるに従って中原ワールドは全開する。スタイル画では、足元の靴、手の指先、目、髪の毛先、帽子、アクセサリのどこかをアップにしても手を抜いてはいない。そして、細身でスラッとした女性が服のデザインに最もふさわしいポーズで描かれている。1957年4月号から59年2月号までの連載「スタイル画をかきたいひとへ」では、目、鼻、口などの描き方を解説している。

中原淳一の手にかかるとは、物資不足の時代の「つぎはぎの服」（1947年9月号）でさえ美しく描かれ、古い洋服や着物を新しく作り直すことまで、読者をその気にさせてしまう。中原のイラストは黒いつぶらな瞳の女性が清潔感あふれるすっきりとした美しいラインで描かれ、とにかく豊富なデザインのバリエーションは多くのファンを魅了したに違いない。復刻版別冊には、中原に影響され、現在デザイナーやイラストレーターとして活躍中の、植田いつ子、芦田淳、花井幸子、金子功、宇野亜喜良、さらに瀬戸内寂聴、吉沢久子、ペギー葉山、朝丘雪路、淡路恵子、司葉子、美輪明宏らがそれぞれに憧れた思い出を寄せていることから、ファッション界をはじめとして各界への多大な影響がうかがえる。

復刻版別冊には「中原淳一の雑誌創りは、レイアウト、イラストレーション、校正、洋服のデザイン、モデル選び、撮影場所の設定、着付け、ヘアメイク、撮影の演出、中心となる記事まですべて自分の手で行なうという徹底したものと、その多才ぶりを紹介している。時に、簡単な洋服の作り方では、中原自身が実際にモデルになって布の用意からカットや縫製までをも体験した記事が掲載されている。また、彼は室内のレイアウトまでデザインしている（1950年8月号、1953年



1954年8月号の表紙 中原淳一による

8月号など)。多くの人が住む家にさえ困っていた戦後の混乱期に、家やインテリアに対する憧れや関心を人々に抱かせたのである。中原の才能は子供服、ヘアデザイン、エプロンなどの手芸でも見ることができる。

彼は長年の夢であったパリに、1951年4月から1年2か月間滞在している。ファッションの都への旅が一般には手が届かない時代に、パリの特派員として本誌に「巴里通信」「マロニエだより」「巴里みやげ」を送り、さらにフランス特集（1952年3月号）で読者にパリの空気を届けている。

1954年2月号以降、本誌独自の原型を用いたワンピース、ブラウス、スーツなどの製図が掲載された。また、男性用原型も1955年2月号に載り、戦後の洋裁ブームに呼応していることも見逃せない。

表紙画は、創刊から8号までは木部清、藤田嗣治、中原淳一、長沢節、岩田専太郎、宮本三郎、木下孝則が担当。以降1959年12月号まで、中原ならではの黒くてきらきら輝くつぶらな瞳に特徴のあるロマンティックな女性像が表紙を飾っている。復刻版別冊によると、中原個人の雑誌という印象をもたれないために、あえて彼は表紙画を描かず、他に依頼したと記されている。また復刻版別冊には、創刊号から最終号までの表紙集を載せており、イラストを一斉に見比べることができるので、中原の絵の変化が容易に見てとれる。例えば、パリ滞在中の1951年11月号、翌年3月号の表紙画はブルーとライトブラウンの瞳の女性が描かれており、ヨーロッパの雰囲気が伝わってくる。1959年の表紙のイラストは、これまでの丁寧な多色づかいとは異なり、単調な色づかいのイラストになっており、病に倒れた中原の病状を反映している。そして1960年代の3冊はがらりと趣を変えて、写真が用いられている。

本誌に登場するデザイナーは桑沢洋子、田中千代、杉野芳子、伊東茂平、森英恵ら戦後の日本のファッション界をリードした錚々たるメンバーである。また、水野正夫が服飾手芸の新人として登場する（1951年2月号）。さらに、知的な雰囲気で中原のイラストにそっくりの大内順子（1955年5、11月号、56年12月号など）や、往年の二枚目、岡田真澄も人気モデルとして登場していて興味深い（1955年11月号）。

2004年2月12日から24日まで、大丸ミュージアムで開かれた「没後20年中原淳一展」では、中原の才能が舞台衣裳、人形作り、料理のレシピ考案にまで及んでいたことを紹介していた。来場した多数のかつての少女たちは、再び目にする中原の作品に歓声を上げ、中原が作り上げた「それいゆ」や「ひまわり」などの雑誌に胸をときめかせた少女時代へタイムスリップしていたのが印象的であった。（藤田恵子）